

# 近世墓標の一形態

## ——尖頂方形墓標の展開——

池上 悟

### 一 問題の所在

故人の供養のための墓標は、江戸時代に階層別の規制に基づいて造立されている。十七世紀代は各地の中世以来の石造供養塔の系譜を承けた地区別の伝統が墨守されており、十八世紀代になって全国統一的な近世墓標が確立・普及している。<sup>①</sup>

十七世紀代に各地の伝統を継受した墓石が造立されている中で、幕府所在地である東都を中心とする東日本においては、新たな近世墓標が創出されている。墓石正面上部には社寺建築の入り口上部屋根根の形状である唐破風を写した半円形の額部を造作し、正面下部には蓮華文を表わした基礎部を明確にし、頂部を尖がらせて背面を丸く舟底状に仕上げたものである。この種の墓標については特徴的な形態のどの部分に留意するかによって使用される名称は研究者個々に異なっており、

「舟形碑」、「棋式平石塔」、「板碑形石塔」、「光背形墓標」、「破風付板碑形石碑」、「破風文板碑型石塔」、「唐破風文型墓塔」などさまざまであるが、形状を基本とする考古学的な分類に基づけば、尖頂舟形墓標と呼称するのが適当なところであろう。

現在確認できるところでは、東京都大田区の日蓮宗・池上本門寺境内墓地に所在する元和五（一六一九）年の紀年銘を有する資料が最古の年代を明示するものであり、寛文期以降に普及し、享保期頃まで相対的な下位階層の主體的墓標として展開している状況を確認できる。

近世に造立された墓石は、身分秩序を反映して支配者階層である武士層を上位として町人・庶民まで、一定の規制に従って造立されたものと想定される。<sup>②</sup>

徳川将軍家を頂点とする大名の格差を内包した墓石は、将軍家の宝塔を最高位として石造塔の種別を異にしており、<sup>③</sup>幕府直参旗本墓にも

一定の造立規制を窺うことができる。

尖頂舟形墓標は大名墓の墓石型式に採用されることは基本的には認められないが、旗本墓には江戸時代初期に限定して若干の採用例を確認できる。すなわち、基本的には尖頂舟形墓標は大名・旗本などの支配者階層の当主墓には採用されてはおらず、大名の子女・家臣などの墓石として使用され、町人、庶民などを含む相対的な下位階層に受容されたものと確認できる。

近世初頭の武士階層である旗本当主墓に主体的に採用された墓石型式は宝篋印塔であり、一部に無縫塔なども採用されている。次いでやや時期を隔てて宝篋印塔の造立も制限され、笠付方柱墓標が主体を占めるようになる。これに合せて下位階層では方柱状石材の頂部を成形した近世墓標が成立・普及している。

これら宝篋印塔・笠付方柱型墓標が主体をなす旗本当主墓にあつて、僅少例ではあるが頂部が尖った、墓標本体の断面方形ないしは方柱状を呈する特徴的な墓石型式を確認することができる。旗本墓所のほか、大名墓所においても類似する墓石型式を確認することができる。確認例を検討することによって、未だ総体が不明確である近世墓石の型式別序列の確立の一助としたい。

## 二 個別事例の検討

### 【一】 横浜市：三佛寺：宅間家墓所<sup>(4)</sup>

神奈川県横浜市旭区に所在する浄土宗・三佛寺には、旗本七三〇石宅間家の墓所が造営されている。

宅間氏は藤原氏良門流であり、上杉氏の支流である。『寛政重修諸家譜』によれば初代規富は北條氏直に属し、元和七年に六三歳で没し武蔵国都筑郡二俣川村の三佛寺に葬られている。

宅間家墓所中には、宝篋印塔に先行する墓石型式として二基の屋弛型墓標が造立されている。屋弛型墓標とは方形板状の墓標本体の上部に、山形に額部が突出する屋根を一体として造作した、幅一尺、高さ四〜五尺規模の角礫を多く含んだ凝灰岩を使用して製作した、相模西部の酒匂川流域の足柄平野周縁部に主体的に分布する、近世初頭の地域色に富んだ墓標型式である。

二基の屋弛型墓標のうち一基には「元和五年／碩譽源廓大禪定門」と刻まれており、初代規富の墓標と考えられるが、紀年銘は文献記載年と異なっている。中心分布域を離れて横浜市二俣川地区に屋弛型墓標が所在する背景は、初代規富が北條氏に属した小田原地域との有縁関係が想定される。並置しているいま一基の屋弛型墓標には「元和三年／南無阿弥陀佛心誓□□」と認められ、初代規富室の墓標と思われる。

宅間家は二代忠次が天正十九年に召されて家康に仕え、関ヶ原の役、元和の役にもしたが、寛永二年に武蔵国都筑郡相模国高座郡のうちに於いて三五〇石余を賜っている。さらに四代憲良のとき加増をうけ七三〇石余を知行している。

寛永十三（一六三六）年に没した二代忠次、延宝五（一六七七）年に没した三代憲之の墓塔として宝篋印塔が採用された後、正徳三（一七一三）年に没した四代憲良、享保元（一七一六）年に没した五代憲充の墓塔には尖頂舟形墓標が採用されている。歴代当主墓の宝篋印塔の造立が停止した後に尖頂舟形墓標を採用する類例は、現在他に確認されない稀少例である。

明和七（一七七〇）年に没した六代良豊、文化二（一八〇五）年に没した七代紀峯、文政十（一八二七）年に没した八代憲淵、安政六（一八五九）年に没した九代憲補までは、尖頂舟形墓標からの変遷を明確に確認できる尖頂方形墓標を採用している。

ここに特徴的近代墓標型式の一類型としての尖頂方形墓標出現の一つの系譜を想定することが可能である。

宅間家墓所における尖頂舟形墓標は図示した1～6の六基であり、7～10は基本を変容した尖頂方形墓標と認識することができる。尖頂舟形墓標の規模は、1の本体高さ137cm、幅52cm、厚さ22cmが最大であり、6では厚さは28cmと勝るものの本体高さ121cm、幅50cmと縮小の傾向を示している。四基の尖頂方形墓標は、本体高さは112～117cmと小形

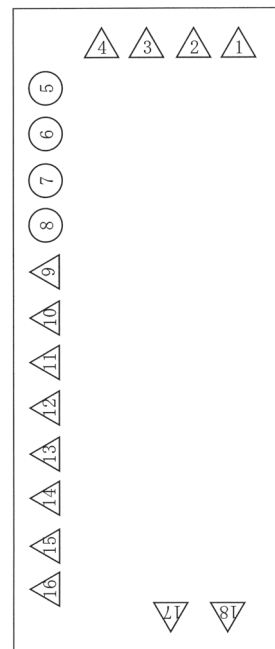
化するが、厚さは舟形から垂直化するに伴って最大で30cmとなっている。

尖頂舟形墓標では、1～3までは継続して本体下端の基礎部に蓮華文を陽刻しているが、4・5では蓮華文は消失し、6で矮小化した蓮華文が復活して表現されている。尖頂方形墓標では、本体下端の基礎部に蓮華文を表現することなく、あわせて基礎部は縮小している

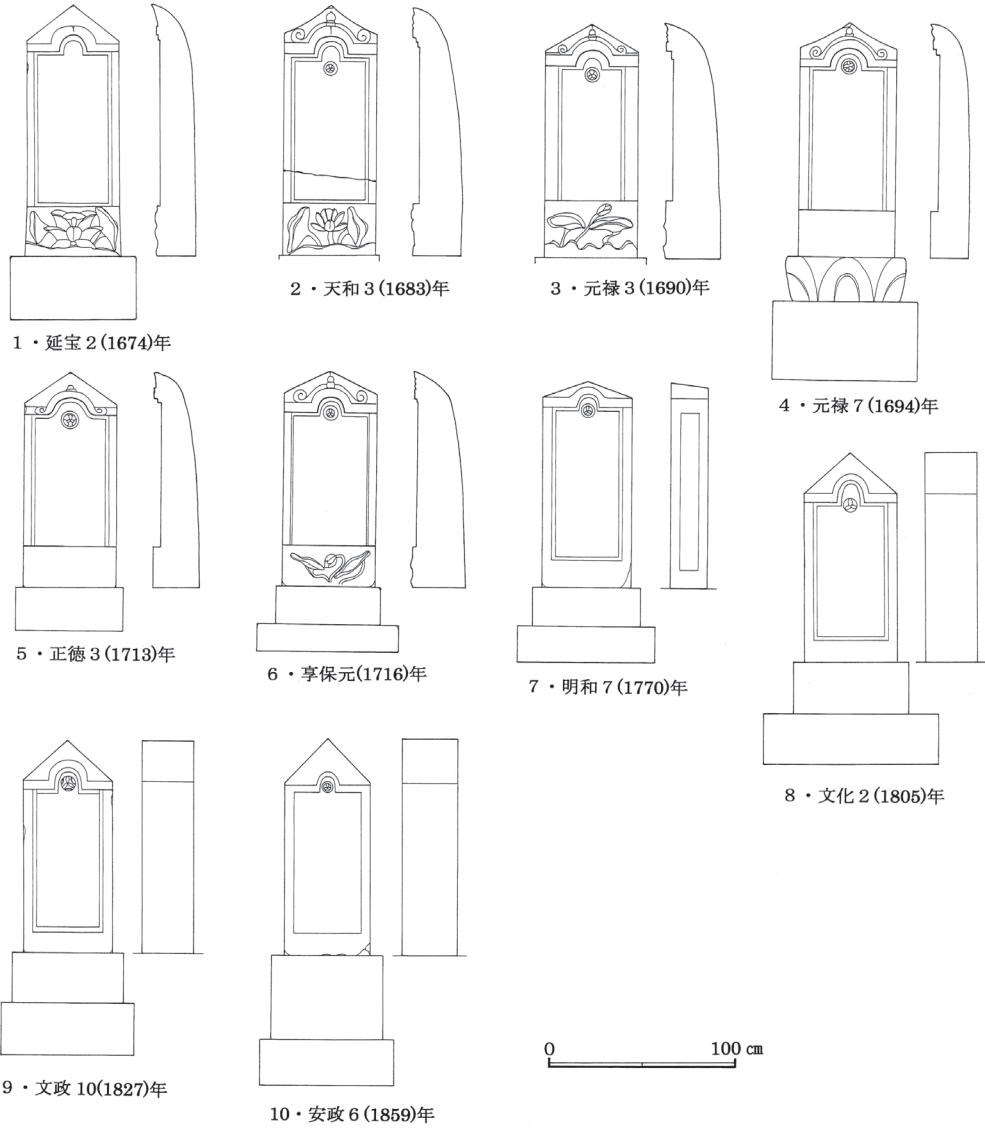
変化の著しい本体基礎部に対して、本体上部に表現された半円形の造作は尖頂舟形墓標・尖頂方形墓標を通じて認められる。尖頂舟形墓標では半円形造作は僅かに突出させており、2～6では上部に天蓋を表現している。

墓標形態変容の画期は7の明和七（一七七〇）年の紀年銘を有する資料であり、背面の舟形成形から平坦成形に転化し、本体下端の基礎部は高さを減じ、本体上部の尖頂部分の高さを低くしている。

墓標に鐫刻された俗名および戒名を『寛政重修諸家譜』により確認



第1図 横浜市・三佛寺宅間家墓所



第2図 宅間家・墓石

すると、1は父に先だって没した三代憲之の嫡男宅間八郎兵衛憲次の墓石であり、2は四代憲良の弟宅間武大夫憲清の墓石と確認できる。宅間憲清は四代憲良の弟であり、廩米二百俵を分かたれて別家を立てている。戒名は「地隆院殿月謙後雪居士」であり、院殿号であるが、号戒名を用いない一〇字戒名とすること、号戒名を用いた十二字戒名とする本家墓標との違いを明確にしている。

3は俗名を宅間善兵衛とするが、系図に該当する者を確認できない。戒名は「覚樹院殿底雄然友信士」であり、院殿号を用いるものの信士の一〇字戒名としており、2と同じく本家当主から外れる別家関連の墓標と想定できる。

		戒 名	年 号		高さ	幅	厚さ
1	宅間八郎兵衛憲次	松厳院殿貞誉江翁孤舟居士	延宝 2	1674	137cm	52cm	22cm
2	宅間武大夫憲清	地隆院殿月謙後雪居士	天和 3	1683	136cm	50cm	27cm
3	宅間善兵衛	覚樹院殿底雄然友信士	元禄 3	1690	126cm	50cm	30cm
4	宅間憲之妻	超岳院殿鏡誉清円大姉	元禄 7	1694	127cm	52cm	20cm
5	宅間伊織憲良	専欄院殿念誉全性自覚居士	正徳 3	1713	117cm	50cm	25cm
6	宅間主膳憲充	随徳院殿暫誉月仙秋白居士	享保元	1716	121cm	50cm	28cm
7	宅間与右衛門良豊	崇厳院殿徳誉仁可亮興居士	明和 7	1770	112cm	48cm	20cm
8	宅間豊後守紀峯	秀厳院殿従五位下仁誉春悟道壽大居士	文化 2	1805	114cm	50cm	28cm
9	宅間与右衛門憲熙	義光院殿然誉白照道廓居士	文政10	1827	115cm	48cm	28cm
10	宅間伊織憲補	清光院殿浄誉真弔教学居士	安政 6	1859	117cm	46cm	30cm
		至誠院殿深誉心月廣照大姉					

第1表 宅間家墓所、墓石一覧

4は三代憲之の妻と明記されており、戒名は「超岳院殿鏡譽清円大姉」として、

院殿号、誉号戒名を用いた

十字戒名であり、別家戒名とは差をつけている。

5は、四代当主の宅間伊

織憲良の墓石であり、戒名

を「専欄院殿念譽全性自覚居士」とした誉号戒名を用

いた十二字戒名である。6

は五代当主である宅間主膳

憲充の墓石であり、7は、

六代当主の宅間与右衛門良

豊の墓石である。ともに本

家の当主としての誉号戒名

を用いた十二字戒名である。

8は、七代当主の宅間豊

後守紀峯の墓石であり、従

五位下に叙任され豊後守の

名乗りを許された宅間家で

は傑出した人物である。戒名を「秀厳院殿従五位下仁譽春悟道壽大居士」として特に従五位下を入れ大居士としている。

9は、八代当主の宅間与右衛門憲熙の墓石であり、10は、九代当主夫妻の戒名を並記した世代墓である。

江戸時代の寛永年間に宝篋印塔を当主墓石として採用した後に、多くの旗本当主の墓石型式は笠付方形墓標に変遷しており、尖頂舟形墓標を採用する例はこの宅間家以外に現在は確認できない。笠付方形墓

標採用に先だって尖頂舟形墓標を旗本歴代当主墓石採用する例は、埼玉県朝霞市の東円寺に造営された土岐家七百石の墓所に確認される程

度であり、墓石の格付けでは尖頂舟形墓標が宝篋印塔および笠付方形墓標より低位である点は明白である。かかる傾向の中で、旗本宅間家

当主墓石としての尖頂舟形墓標の採用の背景は明確ではない。

大名墓においても、例外的に尖頂舟形墓標を採用した事例を確認で

きる。下総生実藩一万石森川家の事例であり、墓所は千葉市の森川山

重俊院に造営されている。寺院名に明確な如くに、旗本森川家の分家

初代である森川重俊を弔うために、分家二代の重政により建立された

ものである。

森川氏は初代氏俊が永禄八年に徳川家康に仕え、軍功により関東入

部に伴い上総国山辺郡の内において采地二千石を賜った。慶長三年に

没して武蔵国比企郡の宗悟寺に葬られ、後代々葬地としている。

森川重俊は天正十二（一五八四）年に氏俊の三男として生まれ、慶

長二年に徳川秀忠に拝謁・勤仕して十四年に下野国内に三千石を賜った。その後、軍功あつて加増され、寛永四（一六二七）年に上総・下総・相模国内に一万石を領し、下総生実に封ぜられた。翌年には老中となったが、寛永九年に秀忠が逝去すると、報恩のために四九歳で殉死している。

この大名に列した重俊の墓石として尖頂舟形墓標が採用されており、総高一丈を測る大形製品である。寛文六（一六六六）年に没した重俊室の墓石も、同規模の尖頂舟形墓標であり、並列する状況は圧巻である。寛文三（一六六三）年に没した二代重政の墓石は総高八尺三寸規模の尖頂舟形墓標であるが、宝永三（一七〇六）年に没した三代重信の墓石は宝篋印塔を採用している。

旗本墓所においては、当主の規制に従って墓石型式を変遷した後、変遷後の墓石型式を継続使用するのが通有の状況といえる。この様相に反して、生実一万石森川家墓所においては、延享三（一七四六）年に没した四代俊胤の墓石は総高七尺規模の尖頂舟形墓標に回帰しており、以後安政五（一八五八）年に没した十一代俊位に至るまで継続使用されている。大名墓墓所としては、確認唯一の稀少例として留意されるところである。

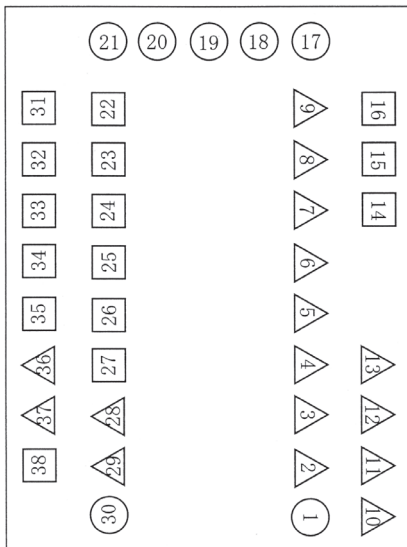
寛文期以降に庶民階層に普及した、一般的に下位に位置づけられる尖頂舟形墓標を敢えて墓石型式として採用した事由は、大名墓に特有な従前の墓石型式にとらわれない独創的型式創案の一端としての特異

型式の維持として理解されよう。

## 〔二〕 坂戸市：永源寺：島田家墓所<sup>(5)</sup>

旗本二千石の島田家墓所は、埼玉県坂戸市永源寺の本堂の裏手に「当寺開基島田氏墓所」として築地塀をめぐるした内部に「コの字」形に三八基の墓石が配置されて丁寧に維持されているが、いずれも本来的位置を保ってはいない。

島田氏は土岐頼康の二男に始まり、利秀が三方原の合戦に浜松城の御留守番をうけたまわり、そのち武蔵国入間郡坂戸の郷に閑居し、慶長十八年に八九歳で没して坂戸に葬られている。法名は永源であり二代重次が一字を建てて永源寺と号し、のち代々葬地とした。初代利



第3図 埼玉県坂戸市・永源寺  
島田家墓所



秀の墓石は配置図中の19の宝篋印塔であり、正面中央に配置されている。

二代重次は大坂の役に供奉し、二千石を賜った。重次嫡男春世は父に先立って寛永十一年に没している。この二代重次の墓石は18の宝篋印塔である。二代重次の子の成重、直時、利氏は別家をおこし、五男利正が三代を継いでいる。このうち永源寺を代々の墓所としたのは宗家を継いだ利正系と、別家の利氏系である。三代利正の男子は、宗家を継いだ利世のほかの四人はいずれも別家を興した。このうち永源寺を代々の墓所としたのは利香系、利木系、利直系である。

三代利正の後、嫡男の利世は父に先だって亡くなり、孫の利宣が四代を継いでいる。四代利宣の弟の利喜も五百石を分与されて別家を興しているが、永源寺を菩提寺としてはいない。

すなわち島田氏諸家のうち、永源寺を代々の墓所としたのは宗家と分家四家の合せて五家であり、これらの五家の歴代家族の墓石のうち維新の混乱期を経て遺存したものが再配置されているものであり、個別家ごとの対応確認は困難である。

総体として宝篋印塔から笠付方柱墓標へ、さらに尖頂方柱墓標への変遷が確認できるが、一方で尖頂舟形墓標からの形態的変遷が想定できる尖頂方形墓標が宝篋印塔に継続して展開している。すなわち宝篋印塔に継続して二系統の墓石が造立されたものと確認できる。

宗家で確認できる墓石は、初代利秀・19の宝篋印塔、二代嫡男春世・

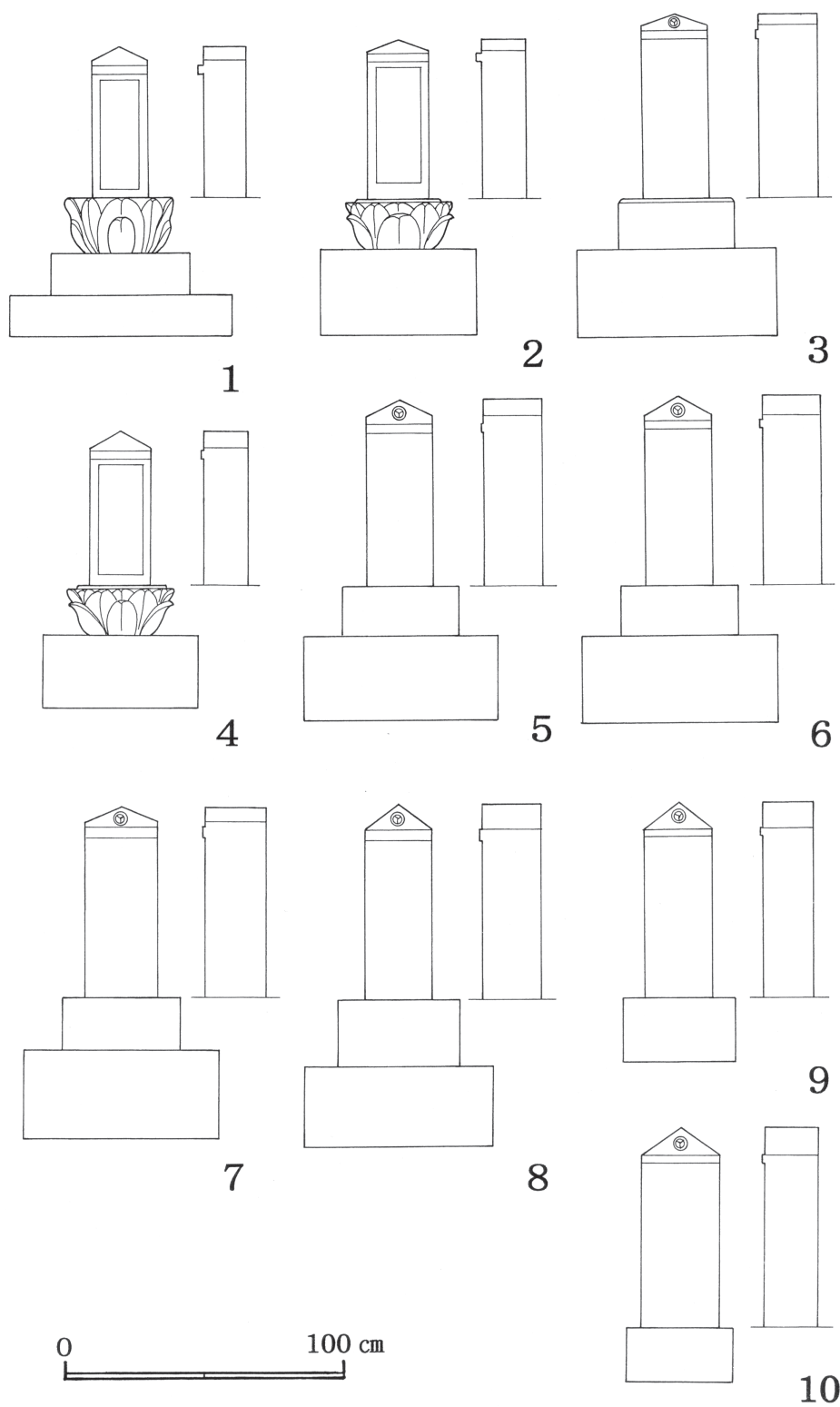
18の宝篋印塔のみであり、他の当主墓石は確認できない。分家では二代重次からの分かれである利氏系で四〜九代に至る墓石が確認できる。三代利正からの分かれである利木系の二代利由の墓石・16には笠付方柱墓標を採用している。また三代利正からの分かれである分家の利香系では初代〜七代の墓石を確認することができる。

一般的に宝篋印塔に起源した旗本当主墓石は笠付方形墓標に墓石型式を変遷する事例が多いが、島田家墓所においては明確ではない。初代墓石の宝篋印塔の後、二代以降の宗家当主の墓石型式は不明であるが、元文二（一七三七）年に没した五代利廣の内室の墓石・33は笠付方形墓標である。この事例を以てすれば、宗家歴代当主の墓石型式は笠付方形墓標であつたものとも考えられよう。

宗家のほかでは、三代利正の子で延宝七（一六七九）年に没した別家の祖である利直の墓石・5は地蔵であるが、正徳六（一七一六）年に没した利直の子の分家二代政信の墓石・35は笠付方形墓標を採用している。また、貞享元（一六八四）年に没した別家の祖である利直の兄弟の利近の墓石・23は笠付方形墓標である。

島田家墓所に特徴的な墓石型式として、墓標の頂部が尖った尖頂方形墓標の存在を確認できる。十基の存在を確認できるうち最古の年代を確認できるのは、三代利正からの別家の祖となった、寛文十二（一六七二）年に没した利香の墓石・9である。

この利香系別家では、宝永七（一七一〇）年に没した二代政輝の墓



第4図 島田家・墓石



		戒 名	年 号	高さ	幅	厚さ	
1		高峯院殿法林一玄庵主覚霊	寛文12	1672	55cm	20cm	15cm
2	島田覚右衛門政暉	自照院殿一燈休山居士愍霊	宝永7	1710	58cm	22cm	16cm
3	嶋田藤七郎源守恒	普門院殿實法常素居士覚位	享保13	1728	67cm	24cm	21cm
4	嶋田氏又四郎利壽	知覚正見居士	享保18	1733	56cm	22cm	16cm
5	嶋田庄五良和氏	源昌院雪山常清居士覚霊	宝暦9	1759	68cm	24cm	21cm
6	嶋田虎之助源歳廣	安住院殿厚樗玄中居士	安永2	1773	69cm	24cm	21cm
7	嶋田庄五郎和氏内室	永壽院殿蓮馨妙霰大姉	安永7	1778	69cm	26cm	22cm
8	嶋田金之尉氏以内室	琳光院殿月桂妙照大姉	寛政6	1794	71cm	44cm	21cm
9	嶋田庄五郎氏徳	修徳院殿謙堂讓翁居士	文政3	1820	71cm	24cm	18cm
10		智徳院殿仁山良努居士	文政13	1830	73cm	28cm	19cm

第2表 永源寺・島田家墓所、墓石一覧

石・8、享保十八（一七三三）年に没した四代正壽の墓石・28も、初代利香の墓石と同じく尖頂方形墓標を採用している。四代正壽の後、宝暦十二（一七六二）年に没した五代正命の墓石・25、明和二（一七六五）年に没した六代正則の墓石・26、安永九（一七八〇）年に没した七代政則の墓石・27はいずれも笠付方形墓標であり、墓石型式の変遷を確認できる。

二代重次の子の利氏に始まる別家の当主墓石にも尖頂方形墓標が採用されている。利氏系別家四代で享保十三（一七二八）年に没した守恒の墓・12、宝暦九（一七五九）年に没した五代和氏の墓石・13、安永七（一七七八）年に没し

た和氏の内室の墓石・37、安永二（一七七三）年に没した六代利廣の墓石・11が尖頂方形墓標である。

これらと同時期の墓石では、四代守恒の養子の利章の墓石・24は笠付方柱墓標であり、五代和氏の子の氏以の墓石・6と、氏以の子の和玄の墓石・2は尖頂方柱墓標である。この墓石型式の違いのみで判断すれば、分家当主墓石に尖頂方形墓標が採用され、当主以外の墓石に異型式の墓石が造立されたものとも判断されるが、氏以の内室の墓石・36が尖頂方形墓標であり単純ではない。

島田家墓所に造立された尖頂方形墓標は、本体高さ55～73cm、幅20～28cm、厚さ15～19cmと、年代の下降に従って大形化する点が確認される。確認最古の年代である寛文十二（一六七二）年から、最新の年代である文政十三（一八三〇）年に至る一五八年間の墓標に確認できる変化は、簡略化の変遷として理解できる。

島田家墓所に造立された尖頂方形墓標は、尖った頂部の下に幅4cmほどの直線状の額部を突出させており、年代の下降に従って突出度合は低くなっている。また、本体正面は枠をもって内部を挟める例が古く、寛文十二（一六七二）年の利香の墓石・1、宝永七（一七一〇）年の政輝の墓石・2、享保十八（一七三三）年の政壽の墓石・4まで認められる。これ以降では挟りを行わずに平坦に仕上げている。

1・2・4はまた、本体を蓮弁表現の基礎に乗せており、以降の様相とは異なっている。



特徴は、頂部の尖出と本体上部の直線状の額部の突出、さらに本体表面の挟りにある。いずれの要素も、江戸時代の元和年間に創出された尖頂舟形墓標からの継受と想定されるところであるが、尖頂舟形墓標に認められる半円形の突出する額部造形は横方向の直線状となり、舟形の背面は平滑に転化している。島田家墓所にも寛永二〇（一六四三）年の尖頂舟形墓標が存在するものの、以降の造立は確認できず尖頂方形墓標への連続性は確認できない。唐突に、完成した墓石型式の導入として造立を開始した状況が想定され、宅間家墓所の形態的連続性の確認とは異なる。

### 【三】新座市…平林寺…大河内松平氏墓所<sup>6</sup>

松平信綱により家運隆盛を極めた大河内松平氏の墓所は、新座市の平林寺に営まれている。信綱は関東の天領を支配した、羽生領の代官の大河内久綱の長男として慶長元（一五九六）年に生まれ、久綱の弟正綱が家を継いでいた相模国甘縄二二一〇石の城主である長沢松平家の養子となった。信綱は家光の小姓として召し出され、寛永四年には一万石の大名に列して老中にすすみ、武蔵国忍三万石から正保四（一六四七）年には川越七万五千石の城主となった。

元和六（一六二〇）年に、養父正綱に実子正信が生まれたので長沢松平家から別に家を興し、大河内松平氏を名乗った。寛文二（一六六二）年に六七歳で没し、武蔵国埼玉郡岩槻の平林寺に葬られている。

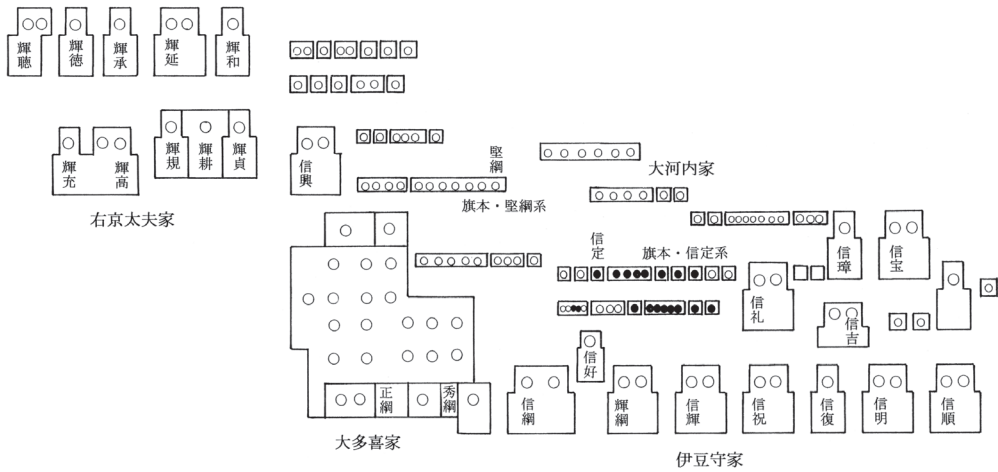
大河内氏と平林寺との係りは、文祿四（一五九五）年に信綱の祖父秀綱の祖母を葬ったことに始まる。その後、元和四（一六一八）年に祖父秀綱、正保三（一六四六）年に父久綱、慶安元（一六四八）年には養父正綱が葬られている。平林寺は、信綱の子の輝綱の代の寛文三（一六六三）年に、埼玉郡岩槻の地から新座郡野火止の地に移されて現在に至っている。

大河内松平家の墓所は、約十三万坪の広さを誇る平林寺境内の伽藍地の奥に、約三千坪の広さの墓域が確保されている。この広大な墓域の中に大河内松平氏の墓所が、家ごとに纏まって配置されている。

参道の正面には大河内氏の祖先、信綱の祖父秀綱、父久綱、養父正綱の墓石としての大形五輪塔を配置している。これらと並列して信綱の墓所が、基壇を整備し周囲に燈籠を配した拝所を前面に伴って、夫婦の大形五輪塔が並置されている。信綱の墓石としての高さ八尺規模の大形五輪塔の地輪正面には「河越侍従松平伊豆守源信綱／松林院殿乾徳全梁大居士／寛文二壬寅年三月十六日」と鐫刻されている。

井上主計頭正就の女である信綱室の墓石は、並置する同規模の五輪塔であり、その地輪正面には「源姓井上氏／隆光院殿太岳静雲大姉／寛永十三丙子三月七日」と鐫刻されている。

この信綱墓所を起点として東側に30m以上に及び並列・重列して形成された、拝所を伴う大形五輪塔をもつてする規格化された墓所は、信綱の子孫のうち、輝綱に始まりのち三河国吉田で七万石を領した伊



第5図 大河内松平氏墓所

豆守家の墓所である。

信綱墓所の西側、大河内氏祖先の墓石の北側に囲いをもつて形成された一画は、信綱の養父正綱の実子の正信に始まる、上総大多喜二万石を領した大多喜家の墓所であり、伊豆守家墓所と同じく八尺規模の五輪塔を主体として造立されているが、個別の基礎を構えない点において格差を明示し

ている。

大多喜家墓所の奥の西側に集中して、拝所を伴う基壇を整備した一群の墓所が造営されている。この墓所は、信綱の子の信興に始まる上野国高崎で八万二千石を領した右京大夫家の墓所である。

この他には、伊豆守家墓所の北側背後に、小形五輪塔、尖頂方形墓標・尖頂方柱墓標などを採用する二列に形成された一群の墓所が占地している。信綱の子の信定に始まる五千石の旗本別家の墓所である。またこの信定系旗本家の西北側には、小形五輪塔と笠付方形墓標を主体として形成された、信綱の子の堅綱に始まる千石の旗本別家の墓所が造営されている。

さらに信定系旗本墓所の奥側には、小形五輪塔を採用して二列にわたって形成された、七一〇石の旗本である大河内家の墓所が造営されている。

すなわちここに窺われるところは、大河内松平氏として纏まって墓所が形成されているものの、それぞれの家の家格に従った墓所造営が実践されており、七万石の伊豆守家と八万二千石の右京大夫家墓所は、基壇を整備した拝所を伴う八尺規模の大形五輪塔、二万石の大多喜家は囲いをもつて形成された区画内に八尺規模の大形五輪塔を造立している。

これに対して七一〇石の大河内家では小形五輪塔、千石の旗本の堅綱系別家の墓所では小形五輪塔と笠付方形墓標を採用しており、五千

石の旗本の信定系別家の墓所では、他とは異なった尖頂方形・方柱墓標を主体として造立している。

ここで検討の対象とするのは、尖頂方形・方柱墓標を主体として造立した、五千石の旗本である信定系別家墓所である。別家初代松平信定は信綱の四男であり、母は井上主計頭正就の女である。寛永十八年に徳川家綱の小姓となり、正保二年に伊勢守に叙任されている。寛文二年に父の遺領常陸国新治郡のうちにおいて五千石を分与されている。享保元（一七一六）年に九〇歳で没して平林寺に葬られている。

初代信定の墓石・1は、高さ48cmを測る二段の基壇の上に、上部に反花を表現し下部には格狭間内に縦連子を表わした幅78cm、高さ32cmの基礎、この上に高さ142cm、幅56cm、厚さ55cmの墓標本体をのせた、総高は222cm（八尺）規模の尖頂方柱墓標である。墓標正面には最上部に三本扇の家紋を表わし、この下を縦長長方形に挟って俗名、戒名、没年を鐫刻している。

江戸時代に創出された尖頂方柱墓標は、この信定墓石に確認できる左右二方向からの頂部の尖出ではなく、前後左右の四方向から方柱の中心部を尖出させる方錐状の頂部を成形する型式が多く、儒者・医師の墓石などに限定されて採用されている。

信定を初代とする五千石の旗本家では、歴代当主がこの墓石型式を継続して造立しており、特徴的な様相を顕示している。更に当主以外の墓石型式も、この初代信定の墓石を規範とした特徴的な墓標が採用

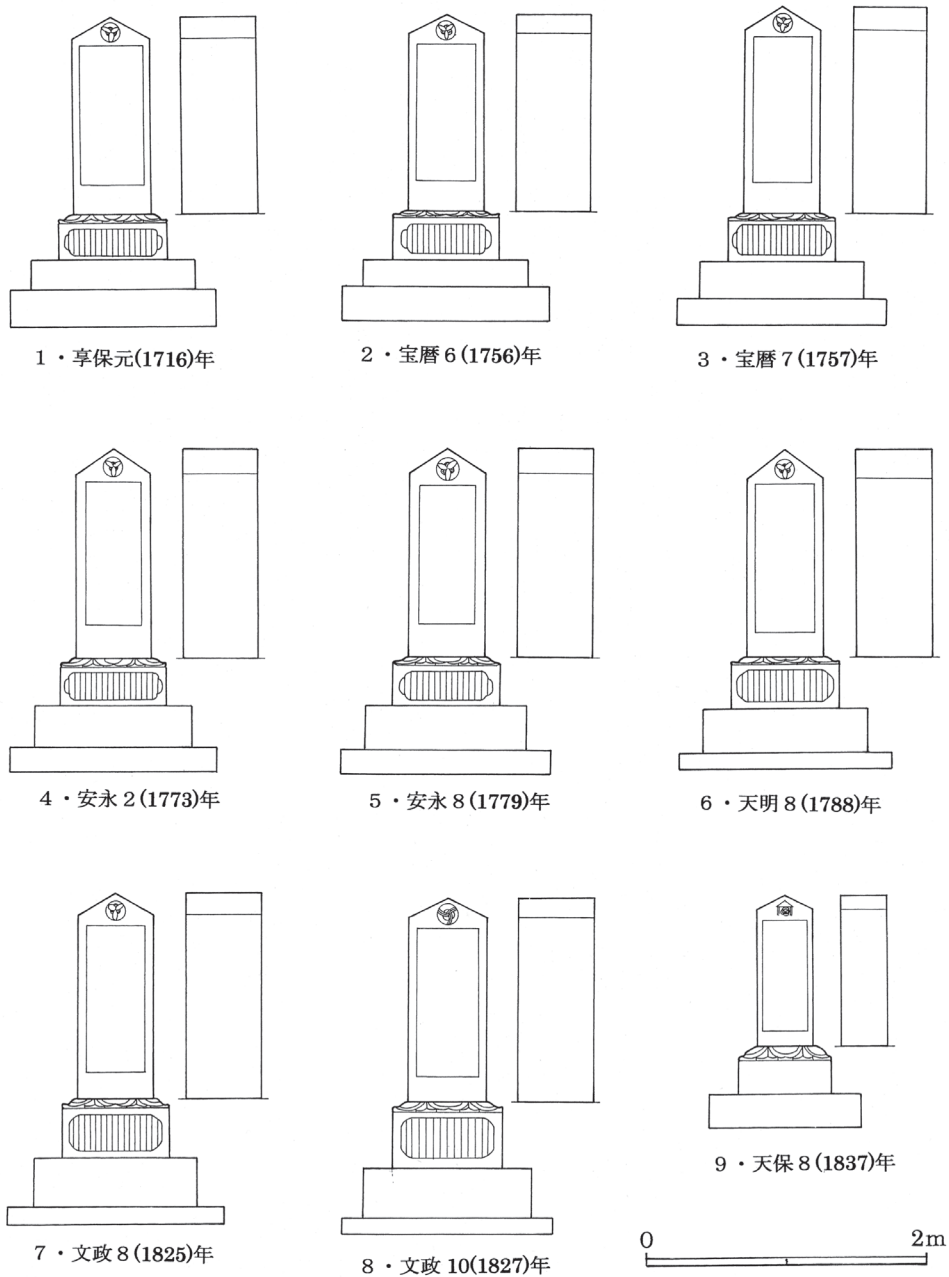
されている。信定の墓石表面には「従五位下松平伊勢守入道栄翁源信定／勇猛院殿高山鐵心大居士／享保元年丙申十二月八日」と鐫刻されており、この記載方法も以後に継承されている。

初代信定の墓石・1として採用された尖頂方柱墓標を採用した当主墓は、宝暦七（一七五七）年に八四歳で没した二代信望の墓石・3、宝暦六（一七五六）年に四〇歳で没した三代信直の墓石・2、安永二（一七七三）年に二三歳で没した四代信睦の墓石・4、大多喜家から養子に入って安永八（一七七九）年に二七歳で没した五代信讓の墓石・5、旗本堅綱系別家から養子に入って天明八（一七八八）年に十九歳で没した六代信敬の墓石・6、五代信讓の子で七代を継ぎ文政八（一八二五）年に没した信彌の墓石・7、文政十（一八二七）年に没した八代信寶の墓石・8である。

これらは墓標本体の高さにおいて高さ142～150cm、幅で54～56cm、厚さで52～55cmの差異であり、同型式・同規模を意識した墓石の造立状況を確認できる。

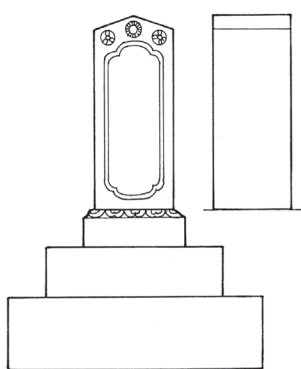
大名家である七万石の伊豆守家、八万二千石の右京大夫家においては、歴代当主墓に並列して同規模の大形五輪塔を当主室の墓石として造立しているが、旗本信定系別家では異なった様相を明示している。

確認できるところは、安永八年に没した五代信讓の墓石・5と、天保八（一八三七）年に没した信讓室の墓石・9の相違である。系図によれば、五代信讓の妻は伊東山城守祐峯の女と確認できる。9は高さ

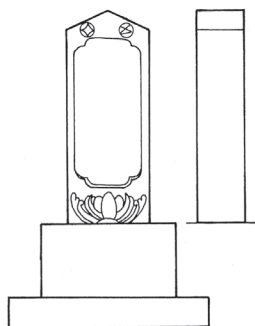


第6図 大河内松平氏・信定系別家墓石(1)

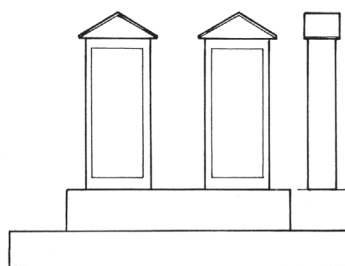




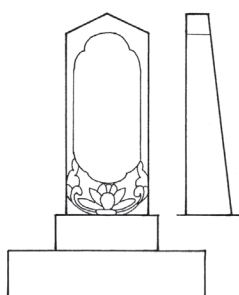
10・寛文12(1672)年



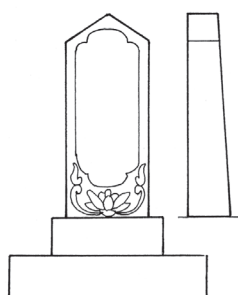
11・嘉永5(1852)年



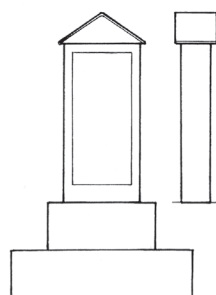
12・万治元(1658)年・寛文5(1665)年



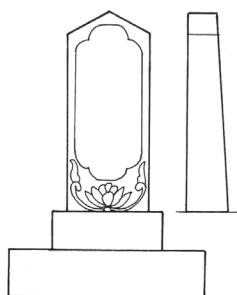
14・延宝7(1679)年



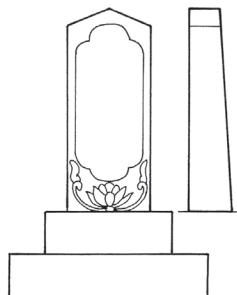
15・延宝8(1680)年



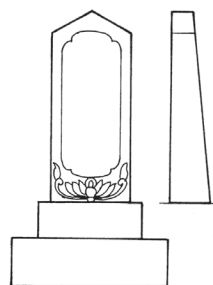
13・寛永10(1633)年



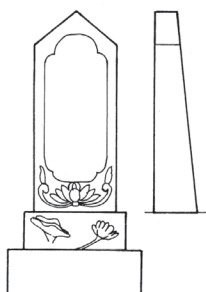
16・天和2(1682)年



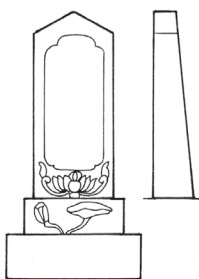
17・天和2(1682)年



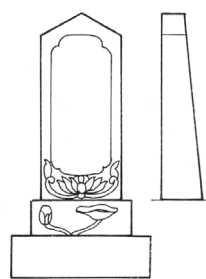
18・寛文6(1678)年



19・延宝3(1675)年



20・寛文9(1669)年



21・寛文9(1669)年

第7図 大河内松平氏・信定系別家墓石(2)

	俗 名	戒 名	年 号	高さ	幅	厚さ
1	従五位下松平伊勢守入道榮翁源信定	勇猛院殿高山鐵心大居士	享保元 1716	142cm	56cm	55cm
2	従五位下松平對馬守源信直	陽光院殿春嶺惟芳大居士	宝暦6 1756	142cm	54cm	54cm
3	従五位下松平駿河守入道長惠源信望	靈光院殿猷峰玄微大居士	宝暦7 1757	149cm	54cm	52cm
4	従五位下松平駿河守源信睦	本量院殿性峰自覺大居士	安永2 1773	150cm	54cm	54cm
5	従五位下松平駿河守源信讓	眞珠院殿龍巖玄驪大居士	安永8 1779	150cm	54cm	53cm
6	松平督三郎源信敬	高性院殿諦菴宗眞大居士	天明8 1788	149cm	54cm	54cm
7	従五位下松平美作守源信彌	養徳院殿湛然常治大居士	文政8 1825	148cm	54cm	54cm
8	松平八十八源信寶	涼源院殿秀巖慈泉大居士	文政10 1827	146cm	56cm	54cm
9	松平駿河守源信讓室	法樹院殿性室貞心大姉	天保8 1837	108cm	40cm	33cm
10		鶴壽院殿華岳元香大姉	寛文12 1672	99cm	40cm	39cm
11	松平美作守源信彌子女	圓智院殿眞觀浄照大姉	嘉永5 1852	108cm	42cm	24cm
12		玄苗童子	万治元 1658	90cm	32cm	14cm
		山腰夢宅童女	寛文5 1665	90cm	32cm	14cm
13		本覺深源童子	寛文10 1633	96cm	38cm	15cm
14		海雲院殿性即慧空童子	延宝7 1679	102cm	42cm	23cm
15		智勝院殿松岩玄靈童子	延宝8 1680	103cm	42cm	21cm
16		陽岳院殿華村幻栄童子	天和2 1682	101cm	42cm	21cm
17		僊桂院殿鑑月宜圓大姉	天和2 1682	103cm	42cm	22cm
18		一穉高天童女	寛文6 1678	97cm	40cm	21cm
19		靈芳院殿俊岩紹英童子	延宝3 1675	102cm	42cm	22cm
20		雪草玄積童子	寛文9 1669	95cm	40cm	20cm
21		永心常光童子	寛文9 1669	95cm	40cm	21cm

第4表 大河内松平氏・信定系別家、墓石一覧

108 cm、幅 40 cm、厚さ 33 cm の規模であり、5 と比較すると高さにおいて 72 %、幅において 74 %、厚さにおいて 62 % に留まっている。ここに当主室の墓石型式としては、基本的に当主墓石型式と同型式を採用するものの、規模において違いを明示している点を確認することができる。更には、5 の幅に対する厚さが 98 % であるのに対し、9 では 83 % となり、墓石本体の厚みを減少させている点も確認することができる。

9 と類似する墓石は 10 である。寛文十二（一六七二）年の紀年銘を有する、尖頂方柱墓石の最古例と確認される、高さ 99 cm、幅 40 cm、厚さ 39 cm の規模の墓石である。俗名および続柄は不明であるが院殿大姉の戒名であり、初代有縁の子女の墓石と想定される。

11 は七代信彌子女と続柄を明記した墓石であり、嘉永五（一八五二）年の紀年銘を刻んだ院殿大姉の戒名を有する、墓石本体高さ 108 cm、幅 42 cm、厚さ 24 cm の規模である。厚さは幅の 57 % に過ぎず、尖頂方形型式と認識される。5・9 の相違を当主と当主墓の違いとすれば、極端に薄い 11 は子女ゆえの区分と理解されよう。

子供の墓石型式としては、二類の異なった墓石の造立を確認することができる。①は板状の石材の上部に三角形の屋根を乗せた形状を一石で造形した尖頂方形墓石である。12 は二基の墓石を同一の基礎上に造立するものであり、万治二（一六五八）年と寛文五（一六六五）年の紀年銘が確認でき、寛文五年以降の造立と確認できる。墓石本体高さ 90 cm、幅 32 cm、厚さ 14 cm の規模であり、上部は前後左右ともに二

四cm張り出している。

13は同型式の墓石であり、寛永十(一六三三)年の紀年銘を有する高さ96cm、幅38cm、厚さ15cmと12よりはやや大きい資料である。

この型式の墓石の上部の張り出し状態は、江戸時代初頭期に相模西部の酒匂川流域に主体的に展開した屋弛型墓標に類似している。現状では相互の関連は不明とせざるを得ないが、所産年代の一致はある程度の関連性を想起せしめる。

子供の墓石型式の②は、定型化した尖頂方形墓石を確認できる。基礎二段の上に墓石本体高さ95～103cm、幅40～42cm、上部が薄くなる下端の厚さ20～23cmの大きさであり、本体表面下端には蓮華を表わしている。造立年代は寛文九(一六六九)年～天和二(一六八二)年に至る十四年間であり、以後の使用を停止している。この間、寛文九年と延宝三(一六七五)年の紀年銘を確認できる三例では、二段目の基礎の表面に蓮華文を表わしており、以降には認められない。

以上的大河内松平氏墓所中の五千石の旗本である信定系別家墓所に確認できる墓石の様相では、尖頂方形型式を家格に従った家に特定の墓石型式として確立して、当主墓石、当主室墓石、子女墓石と厳格に区分して継続造立された状況を確認することができる。

#### 【四】伊勢市…寒松院…藤堂家墓所<sup>7)</sup>

伊勢津藩主藤堂家の墓所は、津市寿町の天台宗寒松院に営まれている。

る。藩祖の藤堂高虎は、弘治二(一五五六)年に近江国犬上郡藤堂村に生まれ、近江の浅井氏、羽柴秀吉の弟の秀長に仕えた後、秀吉により伊予板島で七万石の大名となっている。関ヶ原の戦いでは東軍に従い軍功により今治二〇万石に加増され、その後伊賀一国と伊勢八郡二万石に加増移封されて津藩主となった。大坂の役後には三万石に加増され、寛永七(一六三〇)年に七五歳で亡くなり、江戸・上野の寒松院に葬られている。戒名は「寒松院殿道賢高山権大僧都」であり、「院殿・権大僧都」の戒名は歴代津藩主に継受されている。

津の寒松院は二代藩主高次により創立された昌泉院が始りであり、後に藩祖高虎を祀るようになってからその院号である寒松院に名称を改められて、以後歴代藩主の菩提寺となった。

藤堂家墓所は、本堂の西側に初代から十代までの津藩主とその家族のなどの十五基の墓石が造立されており、本堂の北側には支藩である久居藩の藩主とその家族の墓十一基が並列している。

歴代津藩主の墓石は、初代高虎の供養塔、高虎継室・松壽院の墓石をはじめ300cm(一丈)規模の大形五輪塔が造立されている。延宝四(一六七六)年に没した二代高次・大通院、元禄十六(一七〇三)年に没した三代高久・了義院、宝永五(一七〇八)年に没した四代高睦・大亨院、享保十三(一七二八)年に没した五代高敏・大輪院と、明和七(一七七〇)年に没した八代高悠・到岸院の墓塔が大形五輪塔である。

その後の藩主では、天明七(一七八五)年に没した七代高朗・孝讓

		戒名	年号		高さ	幅	厚さ
1	7代・高朗	孝讓院殿經山高倫権大僧都	天明 5	1785	236cm	88cm	54cm
2	9代・高嶺	祐信院殿清俊高節権大僧都	文化 3	1806	224cm	84cm	54cm
3	10代・高兌	誠徳院殿松巖高秀権大僧都	文政 4	1835	208cm	76cm	48cm
4	9代嫡男・高崧	謙光院殿貞明高□権少僧都	文政11	1828	200cm	76cm	54cm
5	分家8代・高朶	浄心院殿安住解脱大居士	享和 1	1801	154cm	58cm	40cm
6	分家13代・高通	浄國院殿慈忍皆空大居士	文政11	1828	150cm	58cm	40cm
7	分家14代・高栴	光徳院殿月醴翁大居士	嘉永 4	1851	152cm	58cm	41cm
8	分家15代・高聴	常光院殿榮樹簗委大居士	文久 3	1863	126cm	50cm	34cm
9	分家16代・高行	浄巖院殿慈海廣深大居士	安政 6	1859	154cm	58cm	41cm

第5表 三重県津市・寒松院・藤堂家墓所、墓石一覧

院、文化三（一八〇六）年に没した九代高嶺・祐信院、文政七（一二二五）年に没した十代高兌・誠徳院の墓石には、高さ208cm（七尺八寸）規模の尖頂方形墓標が採用されている。

五輪塔から尖頂方形墓標への墓石型式の変遷は、支藩である久居藩の藩主墓石にも確認できる。元禄十（一六九七）年に没した初代藩主藤堂高通は二代津藩主である高次の次男であり、二代が隠居して三代高久に家督を譲るに際して、五万石を分与して久居藩を立藩している。元禄十（一六九七）年に五四歳で没した高通の墓石は、本家津藩主の墓石と同規模の300cm（二丈）規模の大形五輪塔であるが、戒名は「勝光院殿松月龍吟大居士」であり、本家津藩主の戒名の「院

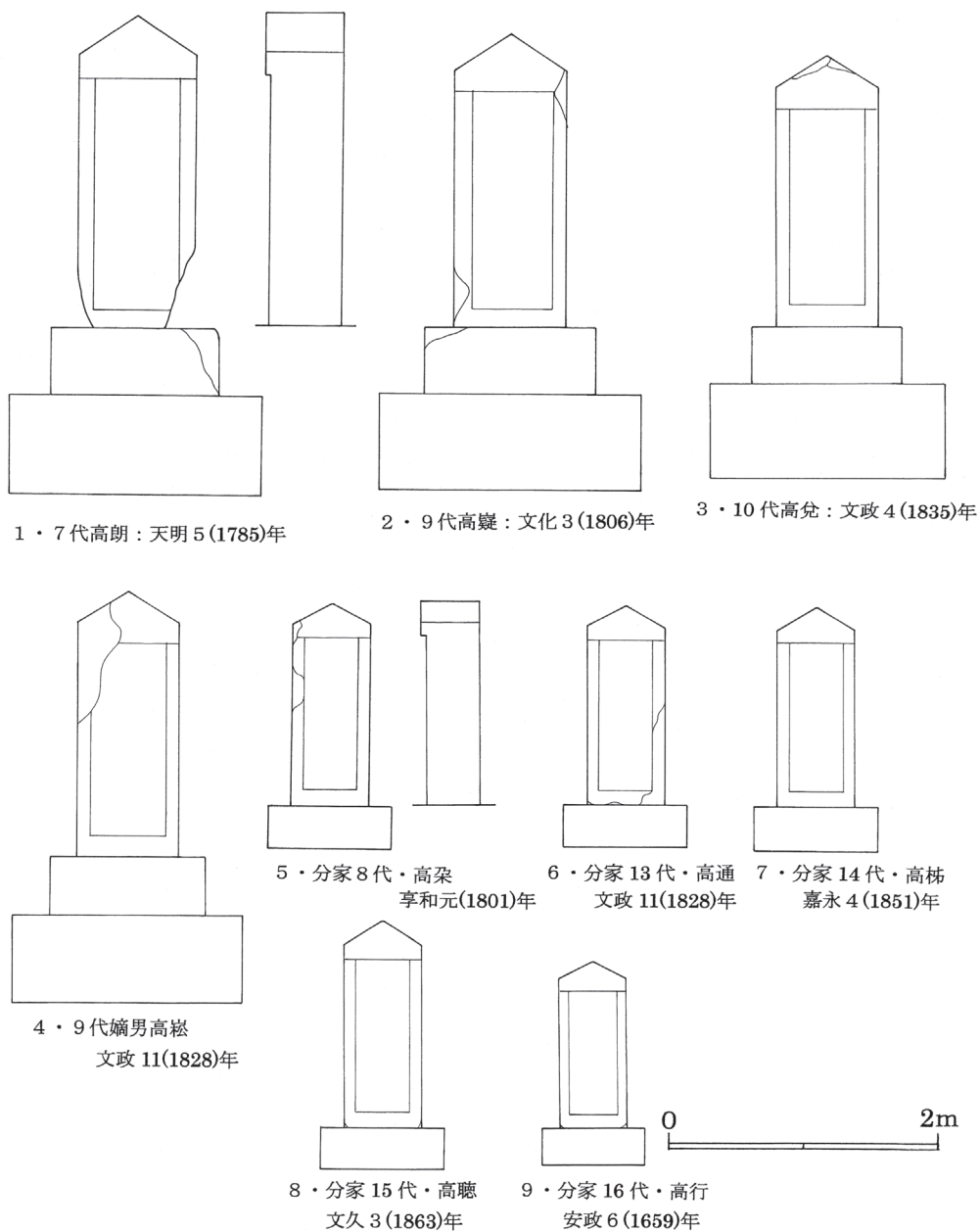
殿・権大僧都」とは明確に区別されている。

寒松院に確認できるところでは、宝暦十二（一七六二）年に四二歳で没した六代高雅・元覚院、安永六（一七六二）年に没した九代高興・威徳院、天明元（一七八二）年に没した十代高衡・徳聚院、寛政二（一七九〇）年に没した十一代高轟・顕徳院の墓石には、高さ200cm（七尺）ほどの中形五輪塔が採用されている。

その後には、享和元（一八〇一）年に没した八代高朶・浄心院、文政十一（一八二八）年に没した十三代高邁・浄國院、嘉永四（一八五二）年に没した十四代高栴・光徳院、安政六（一八五九）年に没した十六代高行・常久院、文久三（一八六三）年に没した十五代高聴・浄巖院の墓石に、高さ126（四尺五寸）154cm（四尺五寸）規模の尖頂方形墓標が採用されている。

以上の藤堂家墓所に確認できる歴代藩主墓石の変遷では、天明五（一七八五）年に没した七代津藩主である藤堂高朗・孝讓院の墓石造立が契機になったものと確認できる。これは1として図示したものであり、二段の基礎の上に本体高さ236cm、幅88cm、厚さ54cmの規模であり、総高は360cm（二丈二尺）を測る。本体の幅に対する厚さは61%であり、方形の部類に属する。頂部は左右両側の二方向から尖る形状であり、本体表面は枳を残して彫り込み、上部は額状に3cmほど突出させている。

九代・十代の墓石も同型式の墓石を採用しているが、本体高さが224







室町時代の絵師狩野正信に始まる狩野家は、江戸時代になると幕府御用絵師として、二百石の旗本格として扱われて隆盛を極めた。江戸初期には狩野光信と孝信兄弟が活躍し、孝信の子世代に諸家に分立している。

守信（探幽）の子孫が鍛冶橋狩野家、尚信の子孫が木挽町狩野家、安信の子孫が宗家として中橋狩野家と称され、木挽町家から別家した浜町狩野家を含めた四家が奥絵師として画壇を牽引した。

このうち絵師集団を統轄する存在が触頭と称され、一代一人に限定されている。この触頭の変遷は、鍛冶橋家の初代・狩野探幽、中橋（宗）家七代の安信、木挽町家二代の常信、中橋家十一代の英信に移った後、木挽町家六代典信以降は五代にわたって木挽町家に限定された状況が明確にされている。

これら狩野四家および関連の墓所は池上本門寺境内に造営されており、旧状はかなり変容されているものの、その重要性に鑑みて平成二四年度に東京都史跡に指定されて保護されている。

狩野四家の墓石のうち、特徴的な尖頂方形墓標を採用したのは木挽町狩野家の当主の墓石のみであり、子女の墓石は円頂方形墓標が主体をなしており、厳然と区分されている。さらに木挽町狩野家の当主の墓石は、亀を象った基礎石である亀趺を伴う点の特徴としている。

慶安三（一六五〇）年に没した木挽町狩野家初代の狩野尚信の墓石は宝篋印塔であり、元和四（一六一八）年に没した鍛冶橋家初代孝信

の墓石も360cm（一丈二尺）規模の宝篋印塔を採用している。また元和九（一六二三）年に没した中橋家六代貞信の墓石は250cm（八尺三寸）規模の五輪塔であり、江戸初期に限定して墓塔が採用されている。

以降は基本的に二百石の旗本当主墓石の変遷に相应しく笠付方柱墓標を採用しており、この変遷の中で木挽町狩野家当主墓石のみに特徴的な亀趺を伴う尖頂方形墓標が採用されている。

亀趺を伴う尖頂方形墓標六基を継続造立した木挽町狩野家当主墓石は、劈頭をなした正徳三（一七一三）年に没した二代常信墓の形状が以後を規定している。かなり変形された亀趺上の墓標本体は、高さ160cm（五尺三寸）、幅65cm、厚さ35cmの規模であり、頂部は左右両方向から尖っており数cm額状に突出し、本体は枠を残して彫り窪められている。戒名は「常心院法印古川道雲日観大居士」である。

享保十三（一七二八）年に没した三代周信墓・享保十六（一七三一）年に没した四代古信の墓石はともに本体高さ113cm規模の尖頂方形墓標である。三代周信墓の形状は二代常川墓の型式に従っているが、四代古信墓は本体上部の額状の突出を省略している。浜町から養子として入って早死にした五代玄信の墓石は、唯一明らかに格下の墓標型式と判断できる円頂方形型墓標を採用している。

寛政二（一七九〇）年に没した六代典信の墓は、二代常信の墓石型式を写しており、木挽町狩野家の中興の祖として位置づけられている。文化十五（一八〇八）年に没した七代惟信の墓石、文政十一（一八二

		墓石型式	年	号	高さ	幅	厚さ
1	狩野主馬尚信	宝篋印塔	元和 4	1650			
2	狩野養朴常信	尖頂方形墓標	正徳 3	1713	160cm	65cm	35cm
3	狩野如川周信	尖頂方形墓標	享保13	1728	113cm	47cm	23cm
4	狩野榮川古信	尖頂方形墓標	享保16	1731	113cm	47cm	31cm
5	狩野愛川玄信	円頂方形墓標	享保16	1731	97cm		
6	狩野榮川院典信	尖頂方形墓標	寛政 2	1790	160cm	65cm	35cm
7	狩野養川院惟信	尖頂方形墓標	文化 5	1808	135cm	55cm	30cm
8	狩野伊川院榮信	尖頂方形墓標	文政11	1828	132cm	57cm	30cm
9	狩野晴川院養信	尖頂方形墓標	弘化 3	1846	135cm	57cm	32cm

第7表 池上本門寺：木挽町狩野家墓所、墓石一覧

八）年に没した八代榮信の墓石、弘化三（一八四六）年に没した九代養信の墓石は、ともに規模を縮小させた同型式の墓石を採用している。

池上本門寺に造営された木挽町狩野家当主墓石の造形的特徴は、墓標本体は上記した津市・寒松院の藤堂家墓所に確認される墓石型式と同一であるが、造立開始年代は正徳三（一七二三）年と七二年先行する点を確認できる。

### 【各墓所における尖頂方形墓標の比較検討】

墓標頂部を左右二方向から尖らせる造形的特徴を顕示する尖頂方形墓標は、頂部の尖出と上部の額部の突出、更に本体表面の枠を残しての彫り込みという

要素を重視すると、現在のところ江戸時代初頭の元和年間の創出と確認できる、頂部が尖出し、上部に半円形の額部を突出させ、背面を舟底状に丸く仕上げた尖頂舟形墓標との型式的連続性が容易に想起されるところである。

この点を具体的に明示する資料は、横浜・三佛寺の宅間家墓所の様相であるが、一七七〇年例で墓標背面を平滑に仕上げて尖頂方形化しているものの、表面上部の半円形の削り込みを維持しており他例とは相違している。ここに確認できる墓石型式が他家墓所の墓石型式に影響を与えたものとは考えられず、特定旗本家固有の墓石型式としての保持と理解されよう。

本体上部が突出する尖頂方形墓標の造形は、寛文十二（一六七二）年を初現年代とする坂戸市・島田家墓所に確認できる。しかしここでは頂部の下に幅五 cm 程度で横に直線状に突出するものであり、個別の様相を保持している。さらにこの型式の墓石は島田本家ではなく分家特有の墓石型式として採用されている事実を確認でき、これまた他に影響を与えるほどのものでは思えない。むしろ他からの影響によって島田家の墓石として採用されたものと想定できる。

大河内松平氏の信定系旗本家に確認できるところは、享保元（一七一六）年に没した初代信定の墓石として造立された尖頂方形柱型墓標が以後の歴代当主の墓石型式を規定している点である。格狭間内を縦連子で充填する基礎上の墓標本体は、高さ142 cm、幅56 cm、厚さ55 cmの方



柱型式であり、歴代当主の墓石の規範となっている。他例と異なるところは、墓標本体の幅と厚さがほぼ等しい方柱型式を採る点であり、子女の墓石は厳然と区分されている。

初代信定の墓石に先行する尖頂方柱型墓標は、寛文十二（一六七二）年の紀年銘を有する本体高さ99cm、幅40cm、厚さ39cmの規模の院殿大姉の戒名を有するものである。続柄は不明であるものの、初代有縁の子女の墓石と想定されるものであり、本体表面の刳り込みに顕著な差異を有するものの、この墓石によって初代信定の墓石の基本が確定したものと想定される。本家の大名家とは異なった墓石型式を意識的に採用した結果と判断できる。

この寛文十二年の院殿大姉の戒名を有する尖頂方柱型墓標は、同時に造立された子女の墓石とは墓標本体の幅と厚さに顕著な差を有するものの、正面観が一致している。寛文九（一六六九）年から天和二（一六八二）年にかけて造立された八基の子女の墓石は、高さ95～103cm規模の本体上部の厚さを減じた尖頂方形墓標であり、本体下端に蓮華文を陽出する点の特徴としている。墓標本体頂部の尖った墓標型式の同規模例としての造立であり、正面の刳り込みも類似する。

従って大河内松平氏の信定系旗本家の墓石は、先行する二段階の墓石型式の変遷の結果として初代信定の墓石型式が確定したものと想定することができよう。ここに確認できる事実とは、尖頂型式の墓石の端緒が寛文年間に遡及する点である。

信定系旗本家の墓石には、寛永十（一六三三）年の紀年銘を有する特徴的な子女の墓石が造立されており、この墓石も頂部を尖らせている。しかしこの墓石型式では、方形本体上部の三角形を呈する屋根部分は前後左右ともに方形本体をから張り出しており、直接的に尖頂方形墓標に連接する墓石型式とは見做し難い。

同型式の墓石としては、万治元（一六五八）年と寛文五（一六六五）年の紀年銘を有する並列墓が確認され、寛文年間までの造立が継続されている。

以上に検討した大名・旗本家墓所に於ける尖頂型式の墓石のほか、同型式の墓石が近世儒者の墓石として造立されている状況が確認される。儒教、特に近世に新たに伝わった朱子学は幕府によって封建支配のための思想として採用された。藤原惺窩の弟子である林羅山が徳川家康に仕え、以来、林家が大学頭に任ぜられ、幕府の文教政策を統制したことが知られている。

埋葬における儒教の影響、すなわち儒葬も有力大名で採用されており、遺骸を埋葬した上に円丘を築造し石碑を造立した定型した様相が、水戸・徳川家、岡山・池田家、阿波・蜂須賀家などに顕著に確認することができる。

近世儒者の墓石としては尖頂型式の墓石が全てではなく、むしろ円頂方柱型式の墓石が勝っている。儒者の墓石としての尖頂型式の墓石は、林羅山の明暦三（一六五七）年を嚆矢としており、以後は儒者の

子弟関係を基本として各地に拡散した如くに看取される。<sup>9)</sup>

#### 四 まとめ

以上の検討からは、大河内松平氏の信定系旗本家の墓石では、寛永年間に遡って墓標本体の頂部を二方向から尖らせた型式の墓標が造立されており、現状では最古例と認識できる。次いでやや時間的懸隔を有して、寛文年間に同じ型式の墓石の造立を確認できる。寛文年間には墓石造立の風が庶民にも及んだ時期であり、その墓石型式は江戸時代になって創出された尖頂舟形墓標が主体を占めている。

従って、この時期における尖頂方形ないしは方柱墓標の現出を、下位階層に普及した尖頂舟形墓標との峻別を意識した、墓石に表出される階層区分の実践例として位置づけることができる。

ここに儒者の墓石としての尖頂方形墓標が関連するが、尖頂型式の墓標は儒者の墓石としての定型化に先行して現出していた可能性が高い。さらには確実に先行して展開した、額をもって造形した頂部の尖つ

た屋弛型墓標の展開を勘案すると、儒者の墓石として採用されるに当たって形態を企画した点が確認されよう。

各地の大名・旗本墓の墓石型式として尖頂型式墓標が採用された背景に、当該期の葬法に影響を与えた儒葬の影響を考慮することは可能であろう。

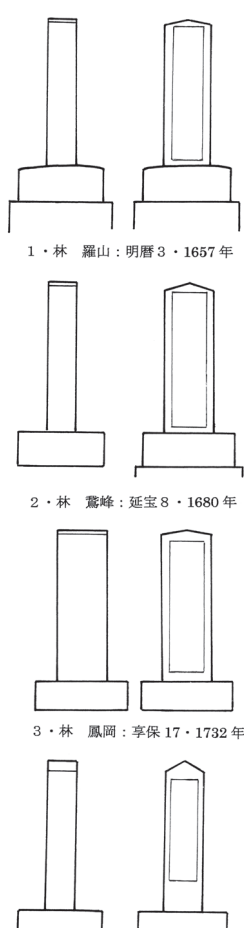
関東各地所在の旗本墓所における歴代当主墓の変遷では、当初主体を占めた宝篋印塔の造立は禄高四千石以下では規制をうけて停止せられ、代わって明暦～寛文年間に笠付方柱墓標が採用されている。

旗本墓所における墓石型式の変遷は、当然に身分秩序に従った規制の結果と判断されることであり、大身五千石旗本家における特異墓石型式の採用も、一連の動向を反映したものと理解されよう。

寛文年間には、旗本島田家墓所においても尖頂方形墓標が採用されており、やや遅れて正徳年間には狩野家でも独特な形状の尖頂方形墓標が造立されている。これらから墓石秩序の確立を瞥見することができることであり、新墓石型式の主体を占めてはいないものの一翼を

担う存在としての尖頂方形墓標の創出と理解できよう。

伊勢津藩主である藤堂家墓所における様相は、別儀と認識される。多くの大名墓は将軍家を最高位とする秩序のもとで特定の家に固有の近世墓石型式を確立・維持しており、特定の大名墓の事情による墓



第10図 儒者の墓石



石型式の変遷と理解される。

大名墓所における変遷は、阿淡二州太守の徳島藩主二五万七千石蜂須賀家墓所でも確認できる。蜂須賀家の菩提寺は、二代藩主忠英以来臨済宗興源寺であったが、十代藩主重喜が明和三（一七六六）年に万年山に儒式墓所を開設している。仏式から儒式に葬儀を変えた結果としての墓所の変遷を確認できる事例である。<sup>10</sup>ともに稀有な事例として認識できるものである。

本稿では、特異な墓石型式である尖頂方形（柱）墓標の創出の時期をほぼ確定できたが、出現に至る具体的な造形的変遷、型式拡散の様相の把握など残された課題も多い。今後継続して検討していきたい。

本稿を草するに当たり、以下の方々に協力頂いた。記して感謝したい。中山 晋、足立佳代、本間岳人、紺野英二、吉田奈央、村山卓、砂生智江、池田奈緒子、上野優真、神林幸太郎、大塚美沙登（順不同・敬称略）

## 註

- (1) 池上 悟「近世墓石の諸相」『立正大学人文科学研究所年報』第四〇号 平成十四年
- (2) 池上 悟『東日本における近世墓石の調査』（立正大学仏教考古学基金平成二三年度助成研究報告）平成二十四年

- (3) 本間岳人「近世大名墓所の標識」『近世大名墓所要覧』平成二二年
- (4) 池上 悟『東日本における近世墓石の調査・2―近世旗本墓所における墓石の変遷―』（立正大学仏教考古学基金平成二四年度助成研究報告）平成二五年
- (5) (4) に同じ
- (6) 平林寺「平林寺」平成二一年
- (7) 駒田利治「東海」『近世大名墓の世界』（季刊考古学・別冊20）平成二五年
- (8) 本間岳人「近世御用絵師・狩野家の墓標変遷とその背景」『考古学の諸相Ⅱ』平成十八年
- (9) 大塚先儒墓所保存会「大塚先儒墓所保存会報告書」大正四年  
鶴田勢湖「大塚先儒墓所1・2・3」『墓蹟』第二一四号 大正十五年  
東京市公園課「大塚先儒墓所の沿革」『掃苔』第二卷第二号 昭和八年  
松原典明『近世大名墓制の考古学的研究』平成二四年
- (10) 三宅良明「四国」『近世大名墓の世界』（季刊考古学・別冊20）平成二五年